

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	小澤 秀一	指導教員 (主査)	田中 勝博

論文題目	青年期における境界例心性と家族構造・家族コミュニケーションとの関連
------	-----------------------------------

本文概要

【問題と目的】 これまで、青年期心性と BPD が類似していることは指摘されていたが (成田 1989)、近年、青年期においてみられる BPD 的な心的様相を「境界例心性」として捉える研究が報告されるようになった (江上, 2010)。BPD の形成には家族要因が関連するのと同様に、境界例心性でも家族要因が影響する (大家, 2006 ; 古川・北山, 2004)。家族要因のひとつとして、コミュニケーションの不全の観点からも検討されており、松野・野末 (2015) の研究では、両親の夫婦関係よりも否定的な家族コミュニケーションに対する認知の方が境界例心性との関連が強く、家族内で交わされるコミュニケーションの質が重要な要因であること、子どもを交えて直接的に行われる相互作用 (コミュニケーション) の影響が大きいことを推察している。よって、2 者関係のみならず、家族全体として捉えることも重要であると言えるだろう。境界例心性を示す子どもと家族の関係性については、これまで母子の 2 者間での研究が中心であり、父親との関係性についての知見が少ないことも挙げられる。家族の多くは母親-父親-子どもの 3 者を主体とするものであることを考えると、境界例心性の家族研究においても、3 者間での家族構造に着目する必要がある。本研究では、境界例心性と家族コミュニケーション、3 者間での家族構造との関連の検討、またどのような家族の在り方が境界例心性の程度を決定しているのかを探索的に検討することを目的とする。

【方法】 大学生、その他含めた 232 名に対し、無記名式のアンケート調査を行った。調査は、①フェイス・シート (年齢, 性別, 主たる男性および女性養育者について, 家族構成, 生活形態) ②境界例心性質問紙 (安立, 1999) ③家族コミュニケーション尺度 (草田・山田, 1998) ④家族構造測定尺度 (狐塚他, 2007) で構成され、インターネット上で配布・回収を行った。

【結果と考察】 本研究では、境界例心性と家族コミュニケーション、3 者間での家族構造との関連の検討、またどのような家族の在り方が境界例心性の程度を決定しているのかを探索的に検討するために、相関分析と 2 要因分散分析を行った。境界例心性と家族コミュニケーションでは、「明確なコミュニケーション」といった肯定的な家族内のコミュニケーションがあると認知していると、境界例心性の程度が低い可能性が示唆された。境界例心性と 3 者間での家族構造では、「結びつき」「勢力」「開放性」が高まることによって境界例心性が低減される可能性が示唆された。家族関係を相互的に評定する「結びつき」「勢力」に関しては、いずれも子どもと両親との関係が重要であり、その強度は適度であることが望ましいと考えられた。「開放性」に関しては、子どもと母親の開放性が強まることで、子どもの境界例心性の強度が低減される可能性が示唆された。よって、家族成員が適度に距離を保ちつつ、外界とのつながりを持つことで健康的な家族構造が形成されることが推察された。また、父子、母子関係ともに境界例心性に同様の影響力があることが示された。青年期の境界例心性には父親の存在も母親と同様に重要であること推察される。境界例心性の低減には、父親の存在も重要視された上で、適度な結びつきを保てており、子どもが両親に対して積極的に発言するなど自己表現できること、また家族以外ともつながりを持っていること、そのなかで明確である肯定的なコミュニケーションがなされていることが重要であると考えられた。境界例心性の支援においては、境界例心性を示す者に対する個別の支援や両親のカップル・セラピーにとどまらず、家族全体を支援対象とし、家族に対する心理教育プログラムの開発や家族合同面接などの介入方法を立案していくことが求められるのではないだろうか。